

桜蔭俳話会 五月句会 (第三五五

回)

平成二十九年五月二十一日(日)

吟行地港の見える丘公園

推薦の句

領事館趾の日だまり夏の蝶

秀一

ばら園のベンチ置きざりの缶ひとつ

明美

夏霞ベイブリッジは額の中

かおる

緑さす風の流るる墳墓かな

邦子

井戸残す領事館跡落し文

友子

ベイブリッジの車ゆつくり夏の蝶

ヤエ子

原句：白き巨船見つめてをりぬサン
グラス

友子

理由：サングラスと「見る」は同時に
使わないように留意する。

添削：白い巨船焦点へ置くサングラス

原句：子規展や芸亭桜葉となりぬ

かおる

理由：子規展と芸亭の桜のどちらに
焦点があるのか不明。

添削：葉桜や芸亭の窓片開き

原句：愛妻に薔薇を写して送りけり

眞壽

理由：作者の気持は解るが、ダイレク
トに「愛妻」とするのは、少し押さえ
て。香りはまだ電気信号に置き換え
られないことを主眼にする。

添削例：薔薇の香や画像は妻に送信
す

原句：ひんやりの愛の母子像カズコバ

ラ

かおる

理由：米軍機墜落事故に由来する

母子像である。その悲惨な結果と

現況に対する想いが、「ひんやり」

である。「この把握には同感するが、

果して「の」とするべきかどうか。

添削例：ひんやりと「愛の母子像」カ

ズエバラ

原句：絵を描く足元を過ぐ青蜥蜴

ヤエ子

理由：助詞の「を」は、一句中に二回
使わない方が良い。

添削：スケッチの足元よぎり青蜥蜴

原句：吟行や身に添う風も薔薇色に

邦子

理由：季語は「薔薇色」ではなく、「薔
薇」である。

添削：吟遊の身に添ふ風や薔薇香る

原句：シヤクナゲと見較べて見るビルの群

眞壽

原句：開港の頃より丘の風薫る

友子

理由：見るといふ動詞を、二度使

することはない。

入れる。

添削：石楠花を囲むビル群背比べ

添削句：開港の頃よりの丘風薫る

原句：次々と花咲き散りて今や薔薇

邦子

原句：新樹光コーヒーゼリーゆらゆらと

ヤエ子

理由：単に花と言えば俳句では「桜」

理由：こういう句は、どのような擬態語を使用するかである。上五部分には五音の制約はない。

のこと、それはさておき、四季に恵まれた日本人は、「椿」、「梅」、「桃」、「桜」と多くの花に出会ってきた。

今眼前にあるのは、薔薇である。

添削例：珈琲ゼリーふるふるふるん新樹光

俳句は原則として、眼前直覚を詠むものであるから、句中で「今」とはあらためて言わない。

原句：ゲーテ座の二階に伸びる薔薇

眞壽

添削：次々と花に逢ひしや薔薇香る

理由：位置の説明に動詞を使うと、

ただ一文の平叙文になりやすい。

原句：薔薇の花人の評価も四と六

眞壽

添削例：ゲーテ座の二階の小窓薔薇の花

理由：薔薇好きでも、評価はそれぞれであることを言いたいのであろうが、「四と六」では分かり難い。

原句：小満や好きな靴穿き吟行へ

ヤエ子

添削例：立つ人の評価まちまち薔

理由：「小満」という季語に挑戦した

薇の花

ところは良い。俳句中には俳句に關わる言葉や単語を入れない方が良い。

靴は穿くもの。「はく」といふ動詞

は省略できる。

原句：柵に入り山椒薔薇と確めし

ヤエ子

添削例：小満や好きなところへ好き

な靴

理由：柵は立ち入り禁止の柵であ
ろう。柵を破るのは昔から俳人と
カメラマンに決まっている。

添削例：口々に山椒薔薇と言ひて
過ぐ

（文責：代表 増田守
不在投句 古野明美、松浦かおる）